

〔共同研究〕

## 室町期における諸宗兼学仏教の研究（十一）

— 澄円『浄土十勝論』の書き下し—

### 室町期における諸宗兼学仏教研究会

はじめに

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）に着目し、著書『浄土十勝箋節論』（以下、『浄土十勝論』）十五卷ならびに『同輔助義』四巻を取りあげて、浄土学・真言学の研究者を中心に行っている。

具体的には、これまで一度も活字化されていない『浄土十勝論』『同輔助義』について、嘉永五年刊本（文久四年再版本）を底本とし、翻刻・書き下し文・語注の作成を中心に行っている。また、澄円とその著作に関する個人研究を翻刻作業等と並行して行っている。昨年度より作業のペースアップを考え、書き下しと出典注のみ報告することにした。

今年度の共同研究については、巻上坤上の書き下し及び出典注の作業を終了した。次年度も引き続き書き下しならびに出典注をほどこす作業を行う予定である。また、個人研究も計画的に進めていきたいと考えている。

## 凡例

- 一、本編は『浄土十勝論』の嘉永五年刊本（文久四年再版）を底本として、書き下し・出典注を施したものである。
- 一、書き下しに際し、字体は原則通用漢字に改めた。
- 一、また、書き下すにあたり、底本で判読できない箇所については、大正大学所蔵・寛文三年刊本（寛文本）を参照した。

【書き下し及び注】

浄土十勝箋節論卷上

卷第四章目

立宗根本勝

初紙

墳籍遑躑勝

七紙

該教行益勝

十三紙

超絶師範勝

十五紙

自解他宗勝

二十三紙

精進苦節勝

二十五紙

頓中頓教勝

二十八紙

小聖住報勝

三十紙

凡愚住報勝

三十八紙

不求世樂勝

三十九紙

浄土十勝箋節論卷上

坤上

菩薩大乘戒比丘澄円撰

立宗根本勝<sup>第七</sup>

窃に以れば田主の賢明は是れ万君の模様なり。真宗の建立は<sup>すなわ</sup>迺<sup>ち</sup>諸宗の濫觴なり。原<sup>な</sup>ぬるに夫れ漢明永平の中年に日月の二聖、志を一にし、力を勦て<sup>あ</sup>積氏、氏の墳籍を負いて来朝せしより以降、晋の武帝、太

元中に至るまで三百余迴を歴たり。其の中間に於て入仏の捷徑を開示するの賢聖、多からずと為さず、然りと雖も宗旨を弁立し、時教を勘判するの人、全く無し。爰に慧日中春三五の青嵐に隠れ、法水、拔提金河の夜の灘に涸れて自りの後、一千余年に當りて慧遠く索多し正く仏記を受けて神識を母胎に降して誕応を支那に示し、終に使得東晋の武帝、太元中憤闇を絶離し、廬阜に胡跪して而も居り、客を送るにも虎溪に留りて、影、俗塵に入らず。跡を隠して三十載を歴れども、而して足、山脚を履まず。十八之賢士を招き、千余之皂白に集めて、廬を結びて蓮社と号して、以て六字称楊の妙行を勤じて、池を掘り、菡萏を栽えて、以て四種曼陀の色馥を恋う。爾じ自り以往かた、浄土真宗の教行天下に弥綸し、廬山一家の脈譜率土に充溢せり。敢て問う。之れ答う。四教三觀の宗旨は齊朝に至りて始て河淮に起り、二藏三転の詳判は陳・隋二代に至りて善く能く興盛す。設い什公を立てて以て漢朝の始祖と為すと雖ども、廬山の建宗に殿れたること一十余載か。達磨西來の心宗は、北魏に初て顕われ、地論・摂論の二宗も梁朝に始て立ち、五教浅深の生起は巨唐の始めに興す。三時三宗の実法假名の廢立は唐初より起り、諸四曼三密の秘教は盛唐に將來す。又た俱舍・成実の両家も中古より宗たり。凡そ弁覺大師爾前には、未だ曾て此等の諸宗は有らず。此の義、智人皆之れを知る。庸愚、慮ること莫れ。曰く、敢て問う。之れ答う。慧遠菩薩自ら云く、

又た諸の三昧、其の名甚だ衆けれども、功高くして進み易きは念仏を先と為す上。

『楽邦文類』に云く、

時教は仏説を本とすと雖も、然も時教を洪にすることは、必ず天台を以て始祖と為す。律藏は仏制を本とすと雖も、然も律藏を張ることは、必ず南山を以て始祖と為す。禪宗は仏心を本とすと雖も、然も仏心を伝うることは、必ず達磨を以て始祖と為す。浄土に生ずることを勸むは、固くなに大覺慈尊より出でたり。然れども此の方の人をして念仏三昧有りと知らしむることは、応に遠公法師を以て始

祖と為すべしと<sup>上</sup>已。

高宗皇帝御書の蓮社の記に云く、<sup>③</sup>

臣嘗て天竺の書を読むに、出世間に所謂極楽国なる者の有ることを知る。国に仏有り。阿弥陀と号す。至乃始には国を亨けて位を履しかども、捐て去りて居ら弗んば、超然として独り覚り、心を悟り、聖を証して大願力を以て、普く一切を度す。至乃日用の中に於いて、能く一念を発して、彼の仏号を念ずれば、此の一念に即して清浄純熟し、円満具足す。至乃慧遠が結社の遺意に倣うて、日に妻子を率して、仏を課すこと万過、至乃倡仏の声、潮汐の江に騰るが如しと<sup>上</sup>已。

又た沈璿が曰く、<sup>④</sup>

釈迦如来世に出現して種種の法を説きて衆生を接引し、種種の門に於て最も捷徑なる者は、以て西方安養の教より易きは無し。嗚呼、無量寿仏の四十八願無くんば、則ち西方の教、以て其の端を啓くもの無けん。釈迦如来の諸経を演説すること無くんば、無量寿仏の願、以て世に伝うること無けん。前仏は願を前に作し、後仏は経を後に説く。此の道、章明著較なり。信ずべし。疑うこと無かれ。至乃惟みるに、茲の修行安養の方は、無量寿仏、実に之れを製し、釈迦如来実に之れを筆す。之れを択び之れを伝え、之れを習うて、以て後人に貽す者は、東晋の遠公其人なり。至乃予め輒わち其の始末を識れりと為す。因みに之の言を為して曰く。堯舜禹湯文武周公の道は仲尼を得て、而して後に明なり。仲尼の所伝に沿て、以て深く数聖人の道に入るに至りては、後人の資となる者は、孟軻氏其人なり。西方の教法を以て之れを觀れば、則ち遠公は猶お吾が儒の孟子のごとし<sup>上</sup>已。

又た「結蓮社普勸文」に云く、<sup>⑤</sup>

我れ今ま諸の有縁を勧めて此の蓮社を結ぶ。縦使知り難く弁へ難くとも猶お当に勉力て精勤なるべし。

況んや仏号は甚だ持し易く、浄土は甚だ行き易し。八万四千の法門に是のごときの捷徑は無しと<sup>上</sup>巳。  
無量院の「造弥陀像記」に云く<sup>芝靈</sup>、

弥陀の教觀大蔵に載ること、多からずと為せず。然るに仏化東流して数百年の間、世人殆ど知る者無し。晋の慧遠法師廬山東林に居し、神機独抜にして天下の倡たり。池を鑿り蓮を栽え、堂を建て誓を立て専ら浄業を崇む。号して白蓮社と為す。至乃是の故に、後世浄社を言う者は必ず東林を以て始と為す。厥の後、善導・懷感大に長安に闡き、智覺・慈雲盛に浙右に振う。末流狂妄にして、正道梗塞す。或いは名相に束縛せられ、或いは豁達に沈冥す。故に有いは念仏を貶して、麁行と為し浄業を忽せにして、小道と為ること、自蔽を執隅して、盲じて聞く所無し。聞くと雖も信ぜざる。信ずと雖も、修せざる。修すと雖、勤<sup>わん</sup>ごろならず。是に於て浄土の教門、或いは幾くか息するや。嗚呼、教觀に明らかなることは、孰れか智者のごとくならんや。臨終に『觀經』を挙げて、浄土を讚じて長く逝きぬ。法界に達すること孰れか杜順のごとくなるや。四衆を勧めて仏陀を念じて勝相を感じて西邁しぬ。参<sup>①</sup>禅見性すること、孰れか高玉智覺のごとくならん。皆社を結して念仏して、俱に上品に登る。業儒・有才孰れか劉雷・柳子厚・白樂天のごとくなるや。然れども皆筆を乗り誠を書して、彼土に願生す。是を以て之を觀<sup>ざ</sup>れば、剛明卓抜の識を負いて生死变化の數に達する者に非ざるより、其れ孰れか能く此れを信ぜんやと<sup>上</sup>巳。

六箇の誠証学者、心を留むべし。曰く、

敢て問う。之れ曰く慧遠大師礼文に<sup>葛天</sup>云く、訳師羅什も亦た欽揚す。仏已に靈山にして先ず授記し

たまうと<sup>上</sup>巳。

註礼文に曰く、

羅什とは

師羅什問に入ると聞き即ち書を遣じて好みて通ず。什答書して云く、経に言く已。未後東方に當に護法の菩薩有るべしと。最めよや。仁者善く其の事を弘めよ。上。

七仏訳者の讚美なり。誰か疑を生ずべけんや。諸曰く、敢て問う。答う。薄伽至尊菩提樹下獅子座上に在て、初て淨教の大綱を結して、愛海沈淪の群類を濟度す。

上宮法王は豊葦原中国の四天王寺に於て先尊号の利劍を揮て、祖王生死の怨讐を降伏す。曰く敢て問う。曰く豈に文選に云ざらんや。流れ長きものは則ち竭き難く、根深きものは則ち朽ち難きと。居の諺に曰く、前鋒は初なれば即ち難く、後騎は次なれば是れ易しと。此れは吾が宗の一陳に列なり、他門の殿後に居することを謂うか。爰に諸宗の贗徒等、沮みて曰く、淨教は宗に非ず。何ぞ恚に高ぶりて自ら一家一宗と称するや。諸小僧之を聞きて匍りて曰く、仁者等何ぞ此のごときの不忍の言を出だすや。何ぞ此のごときの不忍の言を出だすや。此れは是れ。蝸鳩鶯鳩の笑いか。此れは是れ蝸鳩鶯鳩の笑か。仁者知らずや。夫れ宗旨とは教行の昌榮に名だたりということを廬山の十八賢、蓮社の一千人、学ぶに九品真典を以てし、行ずるに三字の尊号を以てす。是れ豈に真宗興隆の濫觴に非ずや。慈恩大師の『西方要決』に云く、夫れ以れば、生まれて像季に居り聖を去ること斯れ遥なり。道三乗に預れども契悟するに方無し。人の天の兩位は、躁動にして安からず。智博く情弘きは能く久しく処するに堪えたり。若し識痴に行浅きものは、恐らくは幽塗に溺れなん。必ず須く跡を娑婆に遠ざけ、神を淨域に棲ましむべし。仰ぎ願くは同縁正しく事身心を敬発して此の正宗に依らば、定んで拒割を為さん。幸わくは心を世利に繁りて窄く非常を懼ること勿れ。声安と遠との風を追うとも奚ぞ電影に殊ならん。德肇と生との節に過ぐるとも、誰か乾城を謝せん<sup>上</sup>。

又た迦才法師の『浄土論』に云く、「故に知んぬ、浄土宗の意は本ち凡夫の為にして、兼ねては聖人の為にせりと」<sup>上</sup>。又た曰く、

問うて曰く、浄土の門は凡聖齊しく往く。未だ知らず。宗の意は正しく是れ何れの人ぞや。答えて曰く、<sup>至</sup>、未来世の一切凡夫の煩惱賊の為に害せられたる者の為に清浄業の処を説く<sup>上</sup>。又た曰く、<sup>18</sup>

夫れ浄土の玄門は十方に咸く讚じ、弥陀の宝界は凡聖同じく欣う。然れば則ち、二八の弘規は西土に盛んなり。一九の教えは東夏に凌遅せり、余、每群典を披閱して詳らかに聖言を檢ぶるに此の一宗、窃に要路為り。其れ之れに達する者は、之れを舐みて稽顙し、未だ悟らざる者は矚て躊躇す。若し此れを憑みて神を栖ましめ、終に恐らくは永夜に沈淪せんことを<sup>上</sup>。

又た『疏』の第四に云く、「真宗遇い巨く、浄土の要逢い難し。五趣をして齊しく生ぜしめんと欲すと<sup>19</sup>」<sup>上</sup>。又た曰く、「玄文に曰く、今此の『觀經』は亦た念仏三昧を以て宗と為すと<sup>20</sup>」<sup>上</sup>。又た法照国師の曰く、「禪律如何んが是れ正法なる。念仏三昧は是れ真宗なりと<sup>21</sup>」<sup>上</sup>。衆文明鑑なり。致迷すること莫れ。又た『四分律鈔批』に曰く、<sup>22</sup>

素律師、戒行を用いて宗と為すと云い、夫れ宗を論ずることは、詮を取りて顕わす所なり。詮、既に戒を顕わす。即ち是れ其の宗なり。故に『婆沙』に曰く、「奈耶んが戒を詮すと」。又た云く、「宗は是れ族の義、尊の義、崇の義、重の義なり。此の教の始終、戒行を尊崇す。故に戒行を用いて以て宗と為す。『法華』の如きには、一乘を詮す。即ち一乘を用いて宗と為す。『涅槃』には仏性を詮す。還た仏性を以て宗と為す。此れは既に戒を詮す。如何ぞ宗に非ざらんやと<sup>上</sup>。

今、彼に準じて之れを言わば、三部の妙典は持名の一行を詮す。胡んぞ、宗に非ざらんや。抑<sup>そと</sup>又た宗宗の沙門、一人を敬せずして<sup>不敬王者の論</sup>唯だ三宝の境界に服事し、面面の祖師、生を九蓮に托して、速かに二死の險難を超越することは、是れ正しく廬山大士の洪恩より生ぜり<sup>廬山本記</sup>。夫れ渺漫たる徳海、日日に之れに

浴して其の深きことを報ぜず。峻巖たる恩山、夜夜に之れ戴きて其の重きことを思わずんば、是れ則ち飛禽の樹を惡み、潜魚の水を馱うの謂いか。孔老俱に恩を知らざるの人を炳誠し、孟墨同じく徳を謝せざるの曷い禁遏するの者なり。何に矧んや、釈氏大我の教令に於てをや。然れば則ち菩提樹下には尊重の師友の尸羅を結び、寒林城中には奉事師長の礼節を示したまへり。曰く、敢えて問う。答う。『華嚴』に曰く、「恩を知らざる者は多く横死に遭えりと」上。又た当来の果報、其れ如何ん。

問うて曰く、真宗建立の方、如何ん。

答えて曰く、慧遠大師云く、「諸の三昧、其の名、甚だ衆けれども、功高くして進み易きは念仏を先と為すと」上。是れ其の浄宗廢立の義相なり。例せば、天台は『法華』を以て一代に卓犖すと為す。慈恩は唯識を以て衆典に超絶せりと為るが如し。遠公、爾前には未だ経論の権実を定め、時教の殿最を判ずること有らず。有識の智人、省察せよ。有識の智人、省察せよ。

難じて云く、何ぞ教行の繁広を以て自ら高ふりて浄土真宗の旬しるや。

答えて曰く、此れは是れ何と云うぞや。此れは是れ何と云うぞや。彈指一笑。彈指一笑。凡そ経毎に宗旨を説き、論毎に宗義を判ず。南北の諸師、亦た経論に依りて解脱の捷徑を詳勸する。是れ名づけて宗と為なり。廬山已に鷲峰所説の大経に依りて以て大いに安養浄土の要門を開く。若し之れを宗旨と名づけざんば、是れ何物ぞや。如何ん。諸宗皆な斯の如し。心を留めて自量せよ。

曰く敢えて問う。之れ曰く、天台宗とは、後進、円宗伝持の山に従つて宗名を立てたり。華嚴、三論は所依の経論に従つて宗の名を得たり。真言、仏心宗は所行の法門に約して名を立つ。法相宗は所談の法義に従つて名を立つ。地持、摂論、俱舍、成実、律宗等の諸宗は皆な所依の本文に約して、以て名を得たり。今は吾が門に宗号を立するに即ち其の二有り。所謂る若し所行の妙法に約して以て之れを明かさば、当に

念仏宗と称すべし。若し所生の器界に約して以て之れを論ぜば、応に浄土宗と号すべし。又た浄教は是れ真実究竟最上乘の頓法なり。故に真宗と名づくるのみ。卓抜の学者、知んぬべし。

敢えて問う。之れ答う。彼は弥陀覚王の靈徳に約して以て語うことを為す。今は牟尼至尊の遺教に就いて以て言うことを為す。先後、各其の一を談じて違ふること無し。夫れ如来、未だ去したまわざるの時、逝多林中給孤独園に在して普く八部の大衆に語りて曰く、一切有為の法は夢と幻と泡と影との如し。露の如く、亦た電の如し。応に是の如きの觀を作すべしと。南無阿弥陀仏。

墳籍違躒勝 第八

夫れ以みば菩提樹下には十種大願の誠文有り。居鸞峰山中には五障即詣の授記を賜う。諸荊溪尊者判じて「諸教所讚多在弥陀」<sup>(25)</sup>と云える、是れなり。始説終談、同じく西方を謂う。寔こに以え有るかな。何かなる所以ぞや。弥陀の別願なるが故に、濟凡の秘術なるが故に。原以るに臣は君王の詔を守り、子は嚴父の命に順う。江南淮北の諸賢、皆な勸乎西刹の欣求を勧め、河西河東の群英、悉く東隅の猷離を悔ゆ。然りと雖も三学分内の已見に局られて、窃窃然として未だ六八超世の玄極を弁えず。自力難行の闡域に迂廻して、芒芒焉として猶お他力格外の捷徑に迷えり。古に曰く、知一官に効る。行一郷に比い、徳一君に合し、一国を徴する者は其の自ら視ることなり。亦た此の若しと。此れは顯密の諸宗に於いて、各<sup>おのおの</sup>、一途に長るの人、別願の深邃を悟らざるを謂うか。

問うて云く、言う所は何ぞや。

答えて曰く、天台国師は五逆摂取の文を判じて「此経明觀故説得生」<sup>(26)</sup>と云い、淨影大師は三品下輩の位を定めて「一万却行善趣位中」<sup>(27)</sup>と宣べたり。是れ其の義相なり。此れは是れ他氏詳勘の卒略、余哲看閱の

不審なり。如何が不審なるや。夫れ意みれば、不違念仏転教口称の愚人なり。豈に止観明静の妙行を提撕すべけんや。夫れ十悪五逆具諸不善之の痴類なり。孰んぞ十信万劫の菩薩なりと定めんや。古徳、傷嗟して曰く「弘通西教の祖師、多しと雖も各自宗に会して皆な願意を隠す」と。蓋し此の謂いか。爰に吾宗の高祖京師尊者、古今の釈義を指定して叮嚀に本発重誓願の遼窟を索ぐり、懇懃に深広無涯底の願海を釣りて、逞しく激揚して「一切善悪凡夫得生者莫不皆乘阿弥陀仏大願業力為増上縁」と云いたまえり。這箇語、超世大願の至理を極む。其の文、絶だ奇なり。其の意、又た奥妙なり。宗家より前、未だこの言有らず。京師より後も亦た未だ此の評有らず。

謂いつべし。千百年独到の高判なりと。誰れの智人か之れを讀みて、壅滞を決らざらんや。孰れの学者か、之れを見て漆桶を破らざらんや。夫れ就中く、持名妙行の決定即詣の直因なるの由を詳勘して、一心に専ら弥陀名号を念じて念念に捨てざる者、是れを正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。

と云い、又た聞経称仏の功徳の雌雄を明かすとして、然るに、

仏の願意に望むれば唯だ正念に名を称することを勧む。往生の義、疾きこと雑散の業に同じからず。此の経及び諸部の中の如き、処処に広く歎じて勧めて名を称せしむるを將て要益と為す。

と釈す。這の二箇の評判、殊に戒定薰修の沈麁を詔わずして、独り別意弘願の檀林を賞翫する者をや。夫れ大師の高文好処、極めて多し。此の兩三の明言の如きは、又た妙中の妙なる者なり。五部の書中に此れを第一の要処と為す。是れ則ち天機秀発の解釈なり。亦た從藍而青の別徳に非ずや。花中の芬陀利なり。金中の闍浮金なり。特だ一家九軸の書中のみに非ず。古今の作者を合して之れを求むるに亦た此の如きの憲章無し。若し学仏の漢、讀み得て透徹せば自ら無窮の滋味有らんか。四輩、指を染めよ。四輩、指を染

めよ。

古に曰く、<sup>(32)</sup>

謂いつべし。此の疏は是れ弥陀の伝説なり。何に況んや、大唐に相伝して云く、善導は是れ弥陀の化身なり、と。爾らば謂いつべし。又た此の文は是れ弥陀の直説なり、と。仰ぎて本地を討めれば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語、往生に疑い無し。本迹、異なりと雖も化導は是れ一なり。於是に貧道の昔、茲の典を披閱して粗素意を識とる。立ちどころに余行を捨てて、云に念仏に歸す、と。

誠なるかな、斯の言、夫れ吾が大師は久遠に成道して、本迹俱に高し。普く一切に師として広く群品を濟い、覺王を輔佐して、經を堅くし、緯を精しくして、錦上に華を添え、行中に信を増すのみ。大凡そ歴古より以降た易行捷徑を示すの司南、惟れ多し。善く別願海の源底を窮徹して、妙に弥陀教の壺籩を捜索するに至りては、一如經法の真典に出でたるは無し。言約にして、義豊かに旨深くして、詞雅びなり。所以に安遠に卓犖し、鸞綽に逾邁して大法將為り。真身、世に住すとも是れに如かずとは、豈に虚然ならんや。若し学者有りて、斯の高判を鑑みれば、縦い掩耳の智と雖も剖割を待たず。嗚呼、宜べなるかな、此の典は是れ真宝鏡の如し。法理を照らすこと尽として遺すこと無し。亦た摩尼珠の如く、宝を雨ふらして貧窮の者を濟う。亦た清涼池の如く、諸の熱惱を澡浴す。亦た無畏術の如く、邪毒の害を消伏す。亦た究竟伴の如く、能く險難の道を過ぐ。亦た甘露門の如く、衆聖の遊ぶ所なり。亦た金剛宝の如く、能く外難の軍を摧く。亦た良藥の如く、能く不信の病を愈す。亦た民の王を得んが如く、能く善悪是非を評判す。亦た裸者の嬰孩、好衣慈母を得たるが如く、能く飢寒の苦を除く。此の如くの靈德、端し多し。毛拳に違あらず。若し人、此の典を看得して、子細に檢点し、承諾領許して這の入処を得れば、縦使い大師、復た

生ずるとも、亦た必ず汝に一隻眼を具せることを還さんと道わん。凡そ此等の明文に依りて、匪石の信心を堅固にするの彙いは、十即十生し、百即百生す。誰れの道人か之れを尊重し珍敬せざらんや。往生の得否は只だ斯の文に在る者なり。云云

夫れ黒谷の尊師は、一代八万の法蔵を開くの鍵鑰、八宗九宗の清流を渉るの竜象なり。然りと雖も、順彼仏願故の解釈を見得して、能く滋味を嘗め、暗夜に灯炬を得るが如くして、二死の大夜を照らし、河海に船舶に値たえるが如くして、八苦の愛海を渡る。又た意気雄俊にして言弁縦横し、故に來問を辞せずして、機に応じて以て対答し、賢愚を択ばずして、法を説きて以て撰化したもう者なり。是れ併わせて証定の疏を以て爺孃と為して慧解を生ずる所以なり。

夫れ光明、黒谷の兩傑は、是れ弥陀悲母の応現なり。勢至慈尊の降誕なり。故に慈雲広く覆い、悲雨普く灑ぐ。若し厄難の衆生を視れば、匍匐して以て之れを救済し、立撮して以て之れを汲引す。抑亦た御書の佳名有ることは、是れ君臣同じく之れを敬い、早白俱に之れを尊ぶ故か。

問うて曰く、言う所は何ぞや。

答えて曰く、御の字は唯だ天子の所為に局れり。然るに宗家の製述に於ては独り御書と呼ぶことを得たり。是れ衆典の上の又た一層級なり。

曰く敢えて問う。曰く、顕徳天皇の御記に曰く、(33)

善導和尚の御書を見るに曰く、「身を知れば仮りに合して四大共に成じ、命を識れば浮危にして、譬えば嚴霜の日に對えるに似たり。恐畏らくは、命は石火の照らすこと、期し難きに同じ。識性無常にして逝くこと風燭に踰えたり。故に人人同じく願じて共に往生の業を結すべしといえり」。予、此の視誨に依りて草露の命を堅からざることを馱い、黄金の台の登り易きことを欣う云云。

又た寛元皇帝は道観上人を召して、常に浄教の遊を爲したまえり。常の仰せに曰く、「京師和尚の九軸の御書は具縛の凡夫、出離の勝縁なり」<sup>34</sup>云と。

又た文応皇帝は道教、了観の二哲に交じりて殊に大師垂範して清談したもう。其の論言に曰く、「夫れ光明和尚の四冊の御書は我等凡夫の依学の秘典なり」<sup>35</sup>云と。

又た正応皇帝、永仁皇帝同じく如一人上人を召して、以て御師範と爲して多載一家の解釈を稟習し、常の仰せに曰く、「五部の御書は文約にして義豊かなり」<sup>36</sup>云と。

又た文治の撰録<sup>月輪殿</sup>は、黒谷尊師に随いて光明の踪躅を尋ねたもう。然るに法門談論の刻に示して曰く、「京師八軸の御書は弘願信樂の媒介なり」<sup>37</sup>云と。

此の以外、南北諸宗の高僧、竹園槐門の縉紳等、宗家の製述を呼ぶ毎に皆な御書と称せずということ莫れ。抑小僧、特に浄教を伝受するのみに匪ず。亦た兼ねて台宗を稟承する。茲に因りて両宗の学者、常に来学せり。爰に戸を叩きて浄土宗を来問する人の言を聞けば、皆な御書九帖とのみ云い、又た室に入りて円頓教を諮詢する彙の語を聴くに、悉く大部章疏とのみ云えり。其の故何ぞや。是れ併しながら光明大師の御書を尊重し珍敬する所以なり。若し个の義辺に就きて之れを言えば、這の一章をば亦た御書通呼勝とも名づくべきか。夫れ噫乎痛いかな。堯舜禹湯の大聖爲るや。猶お法王の政途には闇し。項藉悪来が力士爲るや。未だ獄中の鬼卒を撃たず。夫れ鈍刀、骨を切るは必ず砥の助けに由る。重輅の軽く走るは抑、亦た油の縁なり。無智の鉄木、猶お既に此の如し。有情の人類、尊号を持ちて蓋ぞ生死の鉄牽を出づることを得ざらんや。南無阿弥陀仏。

夫れ言い言うて解らざるは是れ鸚鵡か。解し解して行わざるは乃ち猩猩しやうじやうか。当代の聖道自力の学徒、其れ然らざらんや。凡そ経論釈義の載する所を見るに、当今未法の中には只だ教学のみ有りて全く行証無しといえり。今試みに史冊を披きて僧徳を勘うれば、多く学教修行を記すれども、断惑証理を録すること鮮すくなし。

但だし慧文は銅輪に透徹し、南岳は似位に悟入せし等は、是れ大海の一滂か。亦た九牛が一毛か。就中なかんずく本朝緇輩の行迹を視聴するに、三百載より以往こののかた習学の者は牛毛の若くなれども、妙解する者は鱗角よりも稀なり。儘解まほ了することを聴けども、妙行を立つるの彙、鳳翥よりも少なく、曇華よりも希なり。若し爾らば、胡んぞ五略具足の円人と名づけんや。亦た六位周備の行者と号せんや。

今、小愚、難行の疲夫に問て云く、夫れ自力難行の諸道には教行のみ有りて証益無しと雖も、之れを以て足りぬと為るや、否や。

答えて曰く、不なり。若し爾らば、其の期する所、如何。設し教学のみ有りて行証無くんば、那の所詮か有らん。夫れ豈に彼の朱泚漫が童を屠ることを支離益に学び、寿陵余子の行歩を邯鄲に習いしに異ならんや。

曰く、敢えて問う。曰く、『莊子』第十に曰く、<sup>(38)</sup>

朱泚漫、童を屠ること支離益に学ぶ。千金の家を単し、三年にして技成りて、其の巧を用うる所無し上巳。

『註』<sup>(39)</sup> 希に曰く、

単は殫なり。言うところは其の千金の資を竭す。学成ると雖も童の屠るべき無し。此の意は蓋し自ら上巳。莊子の道の広大にして未だ施す所有らざるに喩う。

又た『莊子』第六に曰く、

且子、独り夫の寿陵の余子が行を邯鄲に学ぶを聞く。未だ国能を得ず。又た其の故行を失す。直ちに匍匐して歸るのみ<sup>上</sup>と。

『註』に曰く、

邯鄲に行を失うの喩、尤も佳なり。国能は邯鄲の国中に能する所の歩なり。学未だ成らずして、故歩又た失す。所以に匍匐して歸る<sup>上</sup>と。

玄英『莊子疏』に曰く、「時、昏乱に逢うが故に、聖道行われず」<sup>上</sup>と。

倩<sup>つらつら</sup>以れば、当今末法の聖道諸宗の教学は、是れ朱泮<sup>しゅひん</sup>漫<sup>まん</sup>か。亦た寿陵余子か。若し行証無くんば、多載辛苦の受業、皆な徒設と為らんを笑うべし。屠竜の学、憫むべし。邯鄲の歩か。然るに浄土一門の教益に於いては、下智と高才とを簡ばざるが故に、末代の愚鈍をも捨てず、破戒と罪根の深きとを簡ばざるが故に、逆謗犯重をも撰取す。

然れば則ち教といひ行といひ益といひ、三法具さに該<sup>た</sup>なう。宛かも伊字の三点、面上の三目の如く、相い似て相捨離せず。遙かに六万歳の時に至れるが故に、大いに夫の聖道の教行証の三時代謝するには異なるなり。凡そ教学を致すことは、正しく是れ正行を立てんが為なり。正行を立つることは、亦た即ち証益を得んが為なり。

若し証益無くんば、正行是れ徒らに設くるならん。正行徒らに設くるならば、又た教学何の詮か有りや。鼎の三足具闕其れ如之何。学者商量せよ。学者商量せよ。

莊子之の言を聞けば、譬えば今日方に始めて越に適きて、昔日已に至ると謂うが如し。天下に寧ろ是の理有らんや。此れは当代聖道の行者、各匍いて我れ自ら能く二死の疾療を除きて、以て三藐の平身を得た

りと言わんことを謂う。当今末法の時に顕密諸宗の学者等、未だ五位を経歴せずして、多く未得謂得、未証謂証の上慢を懐けり。是れ則ち太早の躰徒なり。譬えば卵を見て時夜を求め、弾を見て鴟炙を求むるが如し。実に笑懼すべき者か。

抑一切衆生等、戒手繚戻して煩惱の賊を捉うることを得ず。定索細弱にして縛惑障怨を縛ることを得ず。慧劍刃鈍くして、結使の首を断ずることを得ず。然れば則ち惑業の大賊、甚だ荒乱して功德の聖財を劫奪し訖んぬ。然るときは則ち貧窮にして福慧無し。福田乾けるか故に、此の岸を去らんと欲する者も去らず。但し清浄の白業は如来長者の給与したまう所なり。泥裏の真金は、五住怨賊の伺わざる所なり。行者怯弱の心を生ぜず、一心に六字の尊号を唱うべし。夫れ於戲、貴いかな、宜なるかな。名号摩尼宝の光、赫赫として能く法灯磨滅の時を照し、念仏梅檀香の熏い郁郁として、速かに逆謗伊蘭の林に覆し。這の巨益は、是れ諸仏の善巧の能く及ぶ所に非ず。箇の良談は是れ自力外道の能く識る所に匪ず。有道の仁、斟酌せよ。夫れ暴強の者も、終に衰滅の期を見るか。長命の彙も必ず終没の日有り。古に曰く、強呉滅びて荆棘有り。姑蘇台の露、濃濃たり。暴秦衰えて虎狼無し。咸陽宮の煙、片片たり。嗚呼、朝露よりも危脆なるは、是れ有待の依身なり。夕煙よりも須臾なるは、迺ち無頼の形骸なり。夫れ名号梅檀の馥いは、円生百由旬の芬郁にも勝り、王母三千里の熏芳にも超えたり。誰か之を愛玩せざらん者か。南無阿弥陀仏。

超絶師範勝第十

夫れ達池の徳水は四河に分かれて八功を失し、雪山の甘菓は澆季に属して六味に変ず。抑釈迦老子の恵日、娑羅林に隠れたまいし以往、一白祀の内外に不解生滅法の一匂、悞て不見水老鶴の雑語と為りて自り、忝くも結集の慶喜、智慧衰少言多錯謬の欺きを得たまえり。是れ則ち三時代謝し、法験衰微せる故なり。

今情、諸教の師資相承の次第を案するに、且らく法相宗の承継の次第の如きは、慈氏は補処の大士、無著は初地の菩薩、世親は向滿の薩埵なり。又た且だ法相宗のみに匪ず。四家法性宗の師弟の深淺、亦復た斯の如し。且らく三論宗の師資の次第の如くんば、文殊は等覺の大聖、馬鳴は八地の索多、竜樹は初地の聖人なり。又た天台円宗の祖承の如くんば、慧文は銅輪の真位、南岳は鐵輪の内凡、天台は五品の外凡なり。是れ亦た代下り、行淺の致す所なり。

吾が宗紹は然らず。夫れ巨唐の高祖光明尊者は、遠くは西方の教主為り、近くは支那の能化為り。大いに三摩鉢提を開発して、正しく師長綽公を激励す。又た本朝の始祖然公尊師は一代八万の釈典を通利し、五相三諦の玄旨を究極す。茲に困りて黒谷の本師は推して軌範と為し、本国の闍梨は還りて弟子と為る。静かに以れば、劉氏の天下に王として遙かに二百余載を経ることは、是れ文帝の儉約、漢高に勝れたる故なり。李氏の四海に主として久しく二十二世を治することは、迺ち太宗の徳化、神堯に超えたる故なり。今此の淨教の末代澆季に於て八極に繁榮し、法滅百歳に至りて四瀆に流行することは、是れ併ら光明大師は綽公禪師に追躒し、黒谷尊師は叡公和尚に超過したまえる故か。此の義、他門に於て無き所なり。此の旨、余宗に於て絶えたる所なり。尤も奇異とするに足れり。

曰く、敢えて問う。曰く『選択集』に曰く、<sup>43</sup>

問うて曰く、道綽禪師は是れ善導和尚の師なり。抑又た浄土の祖師なり。何ぞ之れを用いざるや。

答えて曰く、道綽禪師は是れ師なりと雖も未だ三昧を発せず。故に自ら往生の得否を知らず。

善導に問うて曰く、道綽、念仏す。往生を得るや否や。

導、一茎の蓮花を弁じて之れを仏前に置かしめて行道七日せんに、萎悴せずんば即ち往生を得んと。之れに依りて七日するに果然として華萎黄せず。

綽、其の深詣を歎ず。因みに入定して生ずることを得べきや否やを觀ぜんことを請う。

導、即ち定に入りて須臾に報じて曰く、師、當に三罪を懺して方に往生すべし。一には、師、嘗つて仏の尊像を安じて檐牖の下に在りき、自らは深房に処れり。二には、出家の人を驅使し策役す。三には屋宇を營造して虫命を損傷す。師、宜しく十方仏の前に於て第一の罪を懺し、四方僧の前に於て第二の罪を懺し、一切衆生の前に於て第三の罪を懺すべしと。

綽公、静かに往咎を思うに、皆な曰うこと虚しからず。是に於て洗心悔謝し訖りて導に見るに即ち曰く、師の罪滅しぬ。後ち當に白光有りて照燭すべし。是れ師の往生の相なり已上、『新修往生伝』と。

爰に知んぬ。善導和尚は、行、三昧を發して、力、師位に堪えたり。解行、凡に非ざること、將に是れ曉らけし。況んや又た、時の人の諺に曰く、仏法東行してより已來このかた、未だ禪師のごとき盛徳は有らず。絶倫の誉れ、得て称すべからざる者か。加之のみならず、『觀經』の文義を條録するの刻に頗る靈瑞を感じ、しほほ慶聖化に預かり、既に聖の冥加を蒙りて、然して經の科文を造る。世、挙げて、証定の疏と稱し、人、之れを貴ぶこと仏の經法の如し。即ち彼の『疏』の第四卷の奥に曰く、「至乃此の義、已に証を請いて定め竟んぬ。一句一字も加減すべからず。写さんと欲する者は、一ら經法の如くせよ。応に知るべし」已。

静かにいれば、善導の『觀經の疏』は是れ西方の指南、行者の目足なり。然れば則ち、西方の行人、必ず須らく珍敬すべし。就中なつかんすく、毎夜夢中に僧有りて玄義を指授す。僧は恐らくは是れ弥陀の応現ならん。爾らば謂いつべし。此の『疏』は是れ弥陀の伝説なり、と。何に況んや、大唐相い伝えて云く、善導は是れ弥陀の化身なり、と。爾らば謂いつべし。又た此の文は是れ弥陀の直説なり、と。既に写さんと欲さん者は一ら經法の如くせよ、と。此の言、誠なるか。仰いで本地を討ぬれば、四十八願の

法王なり。十劫正覺の唱え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語は往生に疑い無し。本迹異なりと雖も化導是れ一なり上と。

抑高祖大師、毫を揮い、翰を染めて教相を排列して両道の難易を區別し、二行の助正を的示す。其の義坦坦然たり。厥の旨、明明然たり。尤も依承すべきに足れり。専ら奉行すべきに足れり。於、宜べなるかな、貴いかな。吾が宗の吾が宗為る、是れ孰か力ぞや。只だ光明の草創より起これり。我が門の我が門為る、亦た誰か徳ぞや。正しく黒谷の守文より生れる者か。

曰く、敢えて問う。曰く、綽公禪師は嘗だに奢摩他を發得せざるのみに匪ず。又た其の解釈を看るに尚お自心策励の闡域こんいきに廻る。然れば則ち、造罪の者、西方に詣でるの由を詳勘すとして、在心、在縁、在決定と云いて、未だ如来、因地の本誓を募らず。光明尊者は罪惡の彙い東隅の隅を離るの故を評判すとして、然るに仏願の意に望むれば、唯だ勧めて正念に名を称うれば、往生の義、疾きこと雜散の業に同じからずと釈して、底極廝下の凡夫、高妙の安養に往生することは是れ乃ち一向に法藏索多の大悲本願の力なりと把定せり一是。

又た綽公は念觀の二行を混濫して助正の不同を弁わべず。宗師は觀仏を以て助行と為し、念仏を以て正業と為したまえり二是。此の例、一に非ず。凡そ両師の解釈、優劣高卑、学者自ら商量せよ。

曰く、敢えて問う。曰く、夫れ然公上人は上乘の尸羅に就いて性無作仮色の義を立て、『要集』の激揚に就いて称名為正の旨を成す。此の所立、甚だ深微なるが故に、本師、叡公和尚、忽ちに良忍上人に値いて相承する所の心法戒体の義、並びに觀法為正の伝を改めて空公上人の所立を仰頼したまえり。

古に言44く、「青は藍より出でて、藍より青し。氷は水之れを為して水より寒きがなり」と。是れ則ち吾が光明尊者、吾が黒谷尊師の謂いか。両英、徳高し。故に四輩、皆な化に従う。孰か之れを崇重せざらんや。

問うて云く、夫れ智者大師は遠くは童樹尊者に勝れ、近くは慧文南岳に超ゆ。且らく『摩訶止観』の第一に云く、「止観の明静なること前代に未だ聞かず」<sup>上巳</sup>と。章安大師、已に智者尊者の所説の『摩訶止観』を指して「前代未聞」と云えり。測り知んぬ、文思の両哲も未だ円頓止観を説きたまわずということ。又た『仏祖統紀』に云く、<sup>46</sup>

吾が仏、出世して諸経を説きたまうと雖も、本懐暢ぶることを得たるは唯だ法華に在り。阿難、結集して自り後、天親、論を作りて経を通すと曰うと雖も、然も文約か<sup>つづま</sup>にして義を申べて、其の大略を挙ぐるのみ。斯の経の大事、教化の始終に至りては、則ち晦<sup>くら</sup>うして未だ明らかならず。羅什翻譯して東のかた此の土に伝うるに暨<sup>およ</sup>びて疏を造りて消釈する者、異論、一に非ず。唯だ我が智者のみ靈山に親り承け、大蘇に証悟して妙旨を發揮し、上乘を幽贊して五義を以て経題を釈し、四尺をもて文句を消し、又た能く十章を以て明静の法門を宣演したまう。於是<sup>こゝ</sup>に解行俱に陳べ、義觀兼ねて挙ぐ。謂いつべし、行人の心鏡、巨夜の明灯なりと。天竺の大論なりと雖も、尚お其の類に非ず。豈に震旦の人の師の能く跋<sup>ふ</sup>て及ぶ所ならんや<sup>云</sup>。

又た問いを設けて曰く、『輔行』に九師の相承を引きて「北斉以前は今の所承に非ず」と謂う。且らく北斉、既に覺心重觀三昧を用ゆ。今此に何が故ぞ覺覺但は一轍なりと斥えるや。將た智者、北斉を斥うに非ずや。

答う。妙玄に法華の十妙を開演して尚お「『中論』を以て相い比ぶること莫かれ」と云い、又た天竺の大論、尚お其の類に非ずと。蓋し、智者、如来の意を用いて法華の妙を明かず。故に童樹、北斉、亦た及ばざる所なり。無生の宗旨、三觀法門の若きは其の實には童樹を祖とし北斉を宗として南岳に稟く。師資相承すること宛かも宿契の如し<sup>上巳</sup>と。

此等の精簡を案ずるに、天台は天親・竜樹に卓犖たくかくし、智者は慧文・南岳に超絶すること分明なる者か。若し爾らば、何ぞ超過師範の義、唯だ浄土の一家のみに在りと云わんや。

答えて曰く、円伏五住の智者の解行、円断無明分真の証位に及ぶべからず。観行五品外凡の智慧、相似鐵輪内凡の観智に等しかるべからず。但だし天竺の大論、尚お其の類も非ずと言わば、只だ是れ法華を詳判することの広博なるに就きて、以て言うことを為すのみ。凡そ四教・三観は、本と竜樹の論説に出づ。若し実に智者、竜猛に勝れば能依・所依忽ちに違翻し、外凡・聖位速かに下上すべき者をや。

夫れ天台大師、位、五品に居ることは、是れ正しく大師の自称なり。又た章安の所判なり。加之のみならず、青史諸伝の文、亦た分明なり。誰か爾らずと云わんや。

次に「止観明静前代未聞」の解釈に至りては、大いに所難の趣には異なるなり。今、当に委しく此の旨を評判すべし。謂く、釈典、漢土に來たりしより以降このかた、定慧の二法を説くの人、一天に溢れたりと雖も未だ明静の法義を示さず。只だ是れ我が祖、恵文禪師、竜樹に依りて三観を説きし従り以後このかた、始めて天下に盛んなり。『摩訶止観』の第一に曰く、

此の止観は天台の智者、己心中の所行の法門を説きたまえるなり。至乃智者は南岳に師とし事う。南岳の徳行、思議すべからず。至乃南岳は恵文禪師に事えたまえり。齊高の世に当たつて河淮に独歩せり。

法門、世の知る所に非ず。地を履み、天を戴いて高く厚きことを知ること莫し。文師の用心、一ら釈論に依れり。論は是れ竜樹の所説、付法藏の中の第十三の師なり。智者の『観心論』に云く「帰命竜樹師」と。驗らかに知んぬ、竜樹は是れ高祖の師なり。至乃天台は南岳の三種の止観を伝えたまえり。上巳

『輔行』の第一に云く(48)、「前代未聞」とは、斯の言、在ましける故有り。南山嘆じて云く、唯だ衝岳台厓、双じて禅恵を弘むと。豈に南山諂附して虚しく授けんや上巳と。

静かに此等の解釈を案ずるに、明静止観の法要は是れ、竜文思智相承の秘跡なりと見えたり。若爾らば、前代未聞の言は専ら、他師の不説を指すなるべし。抑も竜樹南岳全く不法文を天台に諮わず。天台大師更に法要を竜樹南岳に授けず。南岳大師正しく、智者の道を印証したまえり。且つ『仏祖統紀』に天台大師の得旋陀羅尼の相を明かして云わく、

昏曉に苦到ねんごう教うる如くに心を研ぐ。柏を切りて香に代え、柏尽ればこれに継ぐに、栗を以て簾を巻くりて月を進め、月没すればこれを燎すに松を以て二七日を経て、経を誦して是真精進是名真法供養如來というに至りて、身心豁然として、寂として定に入る。持は静に因みて発す妙案の云わく、円門の三昧と陀羅尼と体同じうして、名異なり、三

昧は定に従い、陀羅尼は慧に従う。静とは定なり。即ち法華の前方便なり。持とは空持なり。初めの旋陀羅尼なり。法華を照了すること若し高暉の幽谷に臨めるが如し。日の正午なり。諸法相に達すること、長風の太虚に遊ぶが如し。証を將て師に白す。南岳更に為めに開演す。凡そ自心の悟る所及び師に従いて咨受す。四夜に進を加う。功百年に逾たり。南岳歎じて曰わく、汝に非は証せず。我に非は、識所無けん。人の定は法華三昧の前方便なり。所発の持は旋陀羅尼なり。

凡そ發住を真修と爲し、十信を方便と爲す。今前と云うは正しく五品を指すと云ひ已上。

今此の詳勘を案ずるに、智者尊者は南岳の印証を被りて、初めて所悟の深淺を知り、武津禪師は天台の内証を示して、専ら師資の次第を成ず。然るに綽公禪師は、往生の得否を京師和尚に問い、光明大師は三罪懺摩を玄中尊者に示したまえり。又た叡公上人は戸羅称名の義を空公尊師に尋ね、然公上人は戒体称正の旨を黒谷本師に授く。然れば則ち、彼に類してこれを沮むこと勿れ。此を挙げて彼に同すること勿れ。但し莫以中論相比とは、且らく判教の広多なるに就いて以て言うことを為し、是れ即ち至天台來分別始盛の意なり。学者静かに商量すべし。曰わく敢えて問う。曰わく『新修伝』に曰く、<sup>50</sup>

釈の善導、何れの許の人ということ悉にせず。寰宇に周遊して、道津を求訪す。唐の貞觀中に、西

河綽禪師の方等懺を行じ、及び浄土の九品道場にして『観経』を講ずるを見て導大いに喜びて曰わく、此れ真に仏道に入るの津要なり。余の行業修するは、迂僻にして成じ難し。惟此の観門のみ速かに生死を超えん。吾れこれを得たり上巳と。

又た『続高僧伝』に曰く、

近ごろ山僧善導という者有り。周く寰宇に遊んで道津を求訪す。行きて西河に至りて、道綽師の唯念仏弥陀の浄業を行ずるに遇いて、既に京師に入りて広く此の化を行ずと上巳。

綽導師資の義青史の露点鮮潔なり。学者疑いを生ずること勿れ。抑今余而に語らう。夫れ利見の本は、必らず導空の間に生れり。其の末、万世の後に存ず。万世の後も其れ必らず三学分外の愚冀を度する者と有らんのみ。夫れ倩以れば人知人の鑑有る者、鮮し。若し知人の明鑑有りと、至徳の要道を知る者益鮮し。漢の蕭何は善く知人の鑑有らんかとも、未だ皇化の道を知らず。故に天子に向かいて、覇事を説く。人貴く行卑しきが故に、漢の世二百祀を躡ず。劉徳夏商周に逮わざるは、是れ則ち何公が道を知らざるの致す所なり。然るに今、我が曩聖の善く知人の鑒有りて、亦た玄極の道を知る。然れば則ち天子の爲には、万機の政を説き、諸候の爲には一国の事を示す。所以に其の道徳遠く千年の後に通ず。其の法潤普く十歳の飢を沾す。凡そ他氏の知識と吾師の靈徳と日と同じくして謂うべからざるものか。嗚呼悲しいかな。夫の殷の蜚廉が善く走りしも、阿防追て去るときは、則ち連け走ること能わず。漢樊噲が能く戦しも、獄卒呵責するときは、則ち手を束ねて降を請う。

『大般若』に曰く、

善男善女一たび南無仏陀と称うるに至る。是の善男女は生死の際を窮めて、善根尽くること無し。乃至最後に般涅槃を得んと上巳。

南無阿弥陀仏。

自解他宗勝第十一

夫れ古に云く、生まれながらに知る者は之れ上なり。学びて而も知るは次に良しと。爰に吾が祖黒谷の然公上人は、器宇淵邃・神性敏悟・慧解天縱にして殆んど師長の授与に超ゆ。智弁不器にして妙に他宗の深義を解す。自解旨に合すこと宛も符契の如し。所以に他門の英髦は、印証して之の墳藉を付属し、余宗の賢雄は随喜して之の秘典を奉送す。且く上人の本伝に曰く、<sup>(53)</sup>

然る間、他宗の章疏を披て得る所の義理の邪正を決せんが為に、其の宗の名匠の講下に投りて、自解の義を述するに、名匠之れを聞きて皆な悉く称嘆す。所謂蔵俊僧都正贈僧に謁して、法相宗の法門の自解の義を述するに、蔵俊屢しばしば聞て仰て曰く、我れ等師資相承せるすら未だ此の義を存ぜず。禅下直の人ただに非ず。疑らくは是れ仏陀の境界なり。論主に遇うと雖も、此れに過ぐべからず。智慧の凝邃なること凡愚の類に非ず。吾れ一期の間、供養を展べんと欲すと云云。果して年毎に供物を贈らる人多く之れを瞻る。又た、醍醐寺に三論の名匠字諱を失す。或いは伝に云く、大納言法印寛雅。有りと聞きて、投歩して彼の宗の法門の自解の義を述す。名匠聴受して赧然として汗下りて、更に言うこと能わず。随喜の余りに書櫃数合を取り出して曰く、自宗の章疏に於て付属の仁無し。而るに貴禪大いに斯の法門に達せり。悉く以て委附せんと。即ち之れを授与す。又た慶雅法橋に遇うて華嚴宗の法門の自解の義を述す。慶雅初めには侮慢して高声に徴詰せしかども、後には舌を結び敢て誦杭せず。他門の自解の相伝の義に超えたることを感歎して、華嚴宗の章疏を白馬に負はせて黒谷に送る。人具みな之れを知れり。或る時上人自ら言く、我が性は大巻の書なりと雖も、三遍之れを見れば文暗からず、義分明なりと。将来弘通の八宗の外に

仏心宗を加えて九宗に涉り、広く教相を窺めて粗幽致を得たりと云。惟度衆僧中の炙輶、群萌間の明鏡なり上巳と。

夫れ一代五時の義理分明にして、悉く揚江九五の鏡に懸け、有空華嚴の文釈皎潔として遍く荆山万類の玉を琢く。寔に惟れ一天の導師、万古の独歩なり。学者之れを崇重せよ。自解他門の淵源を究め、独見余宗の秘伝に合す。是れ全く他師の及ばざる所なり。唯、吾が祖一人の勝徳なるのみ。夫れ意れば先ず自解他宗の徳能を顯すは、是れ即ち学者をして独悟真宗の靈徳有ることを知らしめんが為なるのみ。又天台座主顯真、同じき貫長慈鎮、園城の長吏公胤、興福の英髦貞慶、東大の硯学明遍、宝地房の法印証真、竹林房の法印静嚴、安居院の法印聖覺、恵光院の法印永弁、林泉房の法印智海、此等群英は皆な緇林の鸞鳳、学海飛竜、釈門の棟梁、仏家領袖なり。然るに各、上人の所立を服膺し、咸く祖師の法門を信受せり。剩へ師資の礼を致し授受の義を存ず。恭く下の誼を資足す。謹んで二字の状を捧げ、字を名簿の櫃に留め、身を松門の内に容る。加之、華夷の阜白遠近の貴賤、晨暮輻湊津を問ひ、行を立てるもの、済済焉たり、煌煌焉たり。其の従い耐く者の譬へは百川の巨海に歸し、鱗介の龜竜に宗するが猶し。是れ則ち自解大法の靈徳の高昌なる故か。抑又た天機秀発の智弁の卓拔なる故か。於戲悲しいかな、曦和の矢走りて急に我が短命を奪ひ、邪毒の鼓響きて人の五内を破る。『華嚴經』に云く、「寧ろ地獄の苦を受くども、諸仏の名を聞くことを得ん。無量の衆を受けずとも、何ぞ仏名を聞かざらん」と。夫れ意、常に九品真宗の教風を弄す。誠に班婕妤が団雪の扇を忘れたり。口恒に六字尊号の宝珠を銜む。胡んぞ燕の昭王が招涼の珠を求めん。南無阿弥陀仏。

夫れ難行苦行は三世諸仏の修習したまへる所、毘尼精進は十方索多の求学する所なり。爰に巨唐終南の邃窟に神僧有りて居す。号して導公大師と曰う。夙に高門を標わし、頓に塵表に出ず。是れ則ち総じては釈氏家の棟梁、別しては浄土門の枢鍵なり。常に囂塵の境界を馱い、恒に孤峰の絶頂を思う。故に南山に蟄籠して西刹を欣求す。大凡そ神機独発して天性不器なり。其の肌膚は氷雪の若し。綽約たること処子に似たり。五穀を食わず、風を吸い、露を飲み、雲氣に乗じ、飛竜に御して諸四海の外に遊ぶ。識神凝寂にして能く三摩鉢提を発得して、明らかに九品の依正を照見す。威儀蕭然として忽ちに本律の嚴制に超絶し、速かに薄伽筏底の三業に諧当す。本伝に曰く、

是に、篤勤精苦して頭然を救わんが若し。至乃堂に入るときは則ち合掌踞跪して一心に念仏し、力の竭るに非ざれば休まず、乃至寒冷にも亦た須く汗を流すことをもちゆ。此の相状を以て至誠を表す。出ては即ち人の為に浄土の法を説きて諸の道俗を化し、道心を発して浄の土行を修せしむ。暫時も利益を為さざること有ること無し。三十余年別の寢処無く、暫くも睡眠せず洗浴を除きて外に曾て衣を脱がず。般舟行道、礼仏方等、以て己が任と為す。戒品を護持して纖毫も犯せず。曾て目を挙げて女人を視ず。一切の名利心に起念すること無し。綺詞戲笑、亦た未だ之れ有らず。所行の処には争て供養を申ぶ。飲食衣服四事豊饒れども皆自ら入れず、並將て廻施す。好食をば大厨に送りて徒衆に供養し、唯、麤惠を食して纒に身を支えることを得たり。乳酪醍醐皆な飲敢せず、諸、親施れば將て阿弥陀経を写すこと十万余卷、画く所の浄土変相、三百余堵、所在の処、壞れたる伽藍及び故塔等を見ては、皆悉く营造す。灯を然して明続くこと歳常に絶えず、三衣瓶鉢人をして持洗せしめず、始終改むること無し。諸の有縁を化し、毎に自ら独り行きて衆と共に去かず。人と行けば世事を談論して行業を修するを妨げんことを恐る。又曰く、禪師平生に常に乞食を樂う毎に自ら責めて曰く、釈迦尚乃

ち分衛したまう。善導何人なれば端居して供養を索めんと。乃至沙弥までに並に礼を受けず。又曰く、初め綽師普陽に開闡すと聞きて千里を遠しとせず、津を問わんと欲す。時に玄冬の首めに逢う。風落葉を飄して深坑に填満す。遂に瓶鉢を挈げて中に入りて安坐し一心に念仏す。覚えずして已に數日を度る。乃ち聞空中の声を聞く。曰く前すみ行うを得べし。所在遊覆復た罣礙無からんと。遂に坑を出て進程して綽禪師の所に至る。導乃ち自ら阿弥陀仏を念ず。是の如く一声するに則ち一道の光明有りて其の口より出ず。十声より千百声に至るまで、光亦た之の如し。導人に謂て曰く、此の身は獸う可し諸苦逼迫し情偽変易して暫くも休息すること無し乃ち所居の寺前の柳樹に登り西に向いて願じて曰く、願は仏の威神、驟にわかに以て我を接せよ。觀音勢至も亦た来りて我を助けよ。我が此の心をして正念を失せず、驚怖を起さず、弥陀法の中に於て以て退墮を生ぜざらしめたまへと願じ畢りて其の樹上より身を投じて自ら絶す。時に京師の士大夫、誠を傾いて帰信し、咸く其の骨を収めて以て葬す。高宗皇帝、其の念仏するとき、口より光明を出すを知り、又、捨報の時、精至此の如くなるを知りて、寺額を賜りて光明と為す上と。

竹史の載する所、露点鮮潔なり。誰か貴重せざらん者か。抑おそ又た身に十種の靈徳を周備し、語に九品の真宗を闡揚す。所以に受法の上徳は反て弟子と成り、法相の英髦は推て軌範と為す。凡そ北斗以南、無双の異僧なり。西教激揚第一の高祖なり。瑞応伝に曰く、「仏法東行してより未だ禪師のごときの盛なるは有らず」上と。この言誠なる哉。東漸の釈教、皆悉く吾が大師の腸胃なる者をや。然れば則ち設化六合に充塞し利益八極に盈溢せり。夫れ人魚の油灯も未だ中有旅泊の迷闇を照さず、死に従うの賢佐も黄壤独往の嶮難には伴なはず。『後漢書』に曰く、「猶を小雪を以て沸湯に投るがごとし」上と。此れは犯重の小雪を以て尊号の洋銅に投ずるの謂なり。南無阿弥陀仏。

## 頓中頓教勝第十三

夫れ六即智断一生可弁の頓説は是れ一乗の止観より起これり。不起座、三昧現前の秘談は、乃ち三密の大教より生ぜり。然りと雖ども、未だ生死の果縛即ち大涅槃、無明塵勞即ち是れ菩提なりと豁達せざるの日は、本地の三徳甚だ顕れ難く、又た「一切衆生本有薩埵為貪瞋煩惱之所縛故」と達観せざるの時は速証の大覺大いに隔て有り。然るに今、吾が菩薩、大乘頓教一乗海の極談は、之れ与に間有りて懸隔なり。所謂超世本願の玄極は、全く三学式内の推す所に非ず。所以に一念三千の妙観を修せよとも教えず。又た五相三密の観念を凝らせども示さず。只だ格外の一式に任せて、憑を大願業力に繫けしめ、勤を如来の尊号に励ましむる者なり。然る時は則ち依行する者は秋毫の疑惑を断ぜざれども速やかに分段の古郷を出づるなり。高祖大師の曰く、「煩惱を断せず涅槃の分を得。焉んぞ思議すべけんや」。宗家の高断に曰く、「命断須臾に安樂に生ず。即ち是れ頓教菩薩蔵なり」と。又た本朝の祖師の曰く、

天台真言皆な頓教と名づく。然れども彼は断惑証理なるが故に、猶お是れ漸教なり。未断惑の凡夫直に三界の長夜に出過することを明かすことは、偏に是れ此の教なり。故に此の教を以て頓中の頓と為す<sup>上</sup>。

原<sup>本</sup>ぬるに夫れ四乗に各利鈍の不同有り。故に断証に亦た遅疾の差降有り。所謂声聞の極利なるは三生を経て四智を究竟し、縁覚の最鈍なるは百劫を送りて一果を証得す。菩薩の利鈍なるは九劫の超次なり。三乗権行の利鈍斯の如し。又た円密仏乗の中に於て大機上根の人一世に透徹し、小機下根の彙<sup>たぐひ</sup>は多生に得脱す。是れ則ち一乗実修の早晚なり。『般舟讚』に曰く、

釈迦如来の真報土は清浄莊嚴の無勝是なり。娑婆を度せんが為に、化を分けて入る。八相成仏して衆

生を度したまう。或いは人天二乗の法を説き、或いは菩薩涅槃の因を説く。或いは漸、或いは頓、空有を明かして人法二障ふたご双たがひべ除かしむ。根性利なる者、皆な益を蒙る。鈍根無智なれば開悟し難し。『瓔珞經』の中には漸教を説く。万劫の修功不退を証す。『觀經』『彌陀經』等の説は即ち是れ頓教菩薩蔵なり。一日七日専ら仏を称すれば、命断のとき須臾に安樂に生ず。一たび弥陀の涅槃の国に入れば、即ち不退を得て無生を証すと。

そもそも抑遮那大教に依りて速証の相を明からめ、止觀上乘に依りて断迷の義を詳するに、対治断を以て権教の漸断と為す。体達断を以て実教の頓断と為す。今一家浄土の所談は対治体達の二道を以て束ねて漸教と名づけ、不断煩惱の一教を以て、別して頓教と称す。其の優劣の次第、卓抜の学者之れを商量せよ。古に曰く、<sup>(63)</sup>

夫れ尋常の溝には巨魚其の体を還らす所無く、鯢げいしゆ之れが制を為す。歩仞の丘陵には巨獸其の軀を隠す所無く、孽狐げつこの祥と為す、至乃鳥獸は高を厭わず、魚鱉ぎよべつは深を厭わず上巳と。

然るに地住の諸聖、皆な吾門に遊ぶ。謂つべし。究竟衍門の大法、了義頓大の洪教なりと。夫れれば、不肖の小量、豈に大教を尽くさん。須く知量を聞きて、悲願を仰ぐべし。『仁王』に曰く、「形に常の主無く、神に常の家無し。形と神と尚お離る。豈に国有らんや」と。夫れ禿樹定めて禿非ず。春に遇うて則ち榮え華さく。増かさなる氷、何ぞ必ず氷ならん。夏に入りて、則ち洋ひろげ注ぐ。穀芽湿を待ち、卉菓時に結ぶ。本願の機法、其れ然らざらんや。南無阿弥陀仏。

#### 小聖住報勝第十四

夫れ登地登任の大士は、是れ界外報身輔翼の法臣なり。声聞縁覺の小聖は、迺ち界内応身所化の徒弟な

り。所以に摩醯首羅宮の成道には四諦二六の法輪を転せず、施鹿林野苑の正覚には究竟大乘の内庫を開かず。然に今吾が弥陀世尊は大悲深重の余り、猶を敗種決定の彙いを憫たまえり。清浄大海衆の中に全く二乗の死尸を簡はず、無漏実報土の境に専ら孤調の小機を引接す。是れ即ち弥陀願海平等一味の利益、諸仏不共、大悲深重の別化なり。此の義沖邈にして非常の言なれば、常人の耳に入るべからず。故に高祖大師、自徴自記したまえり。所謂、『玄文』に曰く、

問うて曰く、彼の仏及び土、既に報と言はば、報法は高妙にして小聖すら階り難し。垢障の凡夫、云何が入ることを得ん。

答えて曰く、若し衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣し難し。正しく仏願に託して以て強縁と作するに由りて、五乗をして齊く入らせしむることを致すと。

又た『群疑論』に曰く、

問う、若し是れ他受用の土なりといわば、云何ぞ地前の凡夫生ずるや。釈して曰く、計るに彼の地前の菩薩、声聞凡夫は未だ遍満真如を証せず、未だ人法二執を断せず、識心麁劣なるをもつて所変の浄土、地上の諸大菩薩の微細の智心、所変の微妙の受用の浄土には同ずべからず。然るに阿弥陀仏殊勝の本願、増上縁の力を以て彼の地前の諸の小行の菩薩等をして、識心劣なりと雖も如来の本願、勝力に依託して、還て能く彼の地上菩薩の所変の浄土、微妙広大清浄の莊嚴に同くして、亦た見ることを得せしめたまうが故に、他受用の土に生ずと名づく<sup>上巳</sup>と。

師資の解釈、俱に予め来者の問難を顧て、委く尽理の詳勘を致す。末学疑慮を致すこと莫れ。

請い問う、曰く、其の託仏願とは、撰凡五箇の願なり。又た、正しき撰小の別願は、声聞無数の一願是れなり。

曰く敢えて問う、曰く仏地会座の声聞は只ただ是れ暫見にして永住に非ず。今と不類なり。高識の人知ぬべし。従上の所談は伝許伝説す。智人知るべきのみ。因論生論す。

問うて曰く、宗師那なる経文を引きて、安養報土の義を成立し、何なる明拠に依りて報身大寂の旨を印証するや。

答えて曰く、『双卷』『同性』等の三典を引きて、安樂第二の義を証し、『大品般若』の一文に依りて、報身滅度の旨を立つるなり。

問うて曰く、如何が報身入滅の義を証するや。

答えて曰く、難家、『授記経』に依りて、報身常住、応化無常の義趣を成立して、以て弥陀報身の立義を沮はらみ詰す。宗師、『大品』の明文に依りて報身の入滅を成す。

問うて曰く、其の義如何。

答えて曰く、此の義、学者大いに致迷して、解釈の指帰を失せり。今謂く、大師の密意に言く、夫れ博く一代八万の衆典を披きて、細く三身果徳の相貌を明らむるに、常住無常の義相を説くこと、其の文一準ならず。或は法身凝然報応無常と説く経有り。所謂、『涅槃』に曰く、「如来は非常なり。智有るを以ての故に、常法は無智なり、猶し虚空の如し」と。『大品』に曰く、「何等か有為の報、若は法の生往異滅、四念処乃至十八不共法及び一切智、是れを有為の報と名く」と。『大論』に曰く「十八不共は無為なり」と雖も、作法を以ての故に是を有為の法と為す」と。『唯識論』に曰く、

四智心品は所依常なるが故に断ずることも尽くることが無きが故に。亦た説きて常と為す。自性常に非ず。因より生ずるが故に生ずる者は滅に帰す。一向に記したまえる故に」と。

此の外、心地の深蜜、『瑜伽師地』等の諸大乘経論の中に多く法身常住、報応無常の義を明せり。慈恩大師、

嘉祥大師等、多く此の義を存す。且く嘉祥の『法華の疏』に曰く、

問う、三種如来の常無常、云何。答う、亦た四門有り。一には但無常、謂く化身なり。二には但常、謂く法身なり。三には亦たは常、亦たは無常、応身なり。内応と法身と相応すれば、法身も常、応身も亦た常なり。外応浄土にして作仏するが故に、是れ無常なり。問う、何れの文に出づるや。答う、諸仏の師とする所は、所謂る法なり。法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり。此れは是れ常の文なり。七卷の『金光明經』に曰く、応化二身は是れ仮名有るなり。念滅するが故に名づけて無常と為す。四には非常非無常とは、此れ始めは正仏、『中論』に明すが如し。法身は常無常の四句を絶す。此の品の後の文に法身を明して、非実非虚、非如非異とす<sup>上</sup>と。

或は三身常住と説く経有り。所謂『涅槃』に云く、「無常を滅するに因て常色を獲得す。受想行識も亦た復た是の如し<sup>上</sup>」と。『玄義』第十に『浄名經』を引きて曰く、「仏身は無為にして諸数に墮せずと。金剛の体なり。何ぞ疾に何ぞ悩まん<sup>上</sup>」と。『大集經』に云く、「如来の智慧は無辺際にして三種有為の相を遠離す<sup>上</sup>」と。又た『輔行』第一に曰く、「三身相即して暫も離るる時無し。既に法身一切処に偏すと許す。報応未だ嘗て法身を離れず、況や法身の処に二身常に在り。故に知ぬ、三身諸法に偏ず、何ぞ独法身ならん<sup>上</sup>」と。『浄名の疏』に曰く、「報身果滿にして凝然常住なり<sup>上</sup>」と。『運之記』に曰く、「若し金光明、撰論等の説に依れば、如来報身は是れ凝然常なり<sup>上</sup>」と。『守護章』に曰く、「有為の報仏は夢裏の権果、無作の三身は覚前の実仏なり」。又た曰く、「権教の三身は未だ無常を免れず、実教の三身は俱体俱用なり<sup>上</sup>」と。又た『法華』の寿量の本地、無作の三身等は正しく是れ三身常住の明抛なり<sup>云</sup>。又た弘法大師の『真言問答』に曰く、問う、其の意云何。

答う、三身一体の釈迦如来なり。

問う、機根不同にして三身の用異り。何ぞ一体と云わんや。

答う、名は三箇なりと雖も、理体一なる故に一体と云うのみ。

問う、若し体一なりと言わば、『六波羅蜜經』に、仏の応身は刹那に遷変す、化身の仏は疾く涅槃の功德に入る、法身は湛然常住なり、と云うに違す。

答う、其の義違せず、

問う、爾らば其の意何ん。

答う、応化如来、遷滅すと言わば、衆生の機見にして仏の遷滅に非ず。

問う、何を以て爾云うや。

答う、『不空縑索經』に云く、一切の如来の三身一体にして皆毘盧遮那の相好身に等しと。是れを以て之れを知るに、法身を離れたる応化にも非ず、応化を離れたる法身にも非ず、法身常住なれば応化も随つて常なりということを。

問う、若し応化常ならば何が故ぞ『最勝王經』に「前の二種の身は是れ仮名の有なり」と云わんや。

答う、其の仮名とは、大悲の応用、縁に随て隠るるが如く縁に随て顕るるが如しと。故に仮名と云う。

問う、大悲の仮に非ず。已に經の文言顯然なり。何意を以てか強論を生ずるや。

答う、彼の応化の用は本と慈悲より起る。慈悲は即ち是れ仏心を以ての故に、仏心豈に遷滅仮有なるべけんや。

問う、何の經の中に「慈悲を仏心と為す」と云うや。

答う、『觀無量壽經』に云く、「其の仏心とは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」と。

是の如くの文に依りて、応化を常なりと云う。又応化実に滅せば法身も滅すべし。法身常なるを以て応化も亦た常なり。故に『法華經』に云く、「衆生を度せんが為の故に方便の涅槃を現す、而れども、実には滅度せず、常に住して此れ説法す」と、是れ故に応化名有るを以て法身の名を云うこと有り。法身の号有ること無くんば、応化の号を云うこと無し。何を以ての故に、勝義諦の中には一切の名無きを以て、猶を法身の名も無し。況や応化の号有らんや。故に知ぬ。三身の体は一念も離れず、人に隨て三名有り。真理の中には一体も無し。

問う、是の如くの三身一体に衆生の為に説法する時は、三身共に説くと為んや。当に云何。

答う、義を以て之れを言わば、共説各説有るべし。

問う、如何なるが其の共各の意なる。

答う、三身一体なるが故に釈迦説法すれば即ち報法も説き、法身説法すれば是れ報化も説く意を以て知るべし。三身の異と云うは機根の不同なり。自受他受随自、理相融すと雖も、深淺顕密の旨無きに非ず。自ら之れを覚るべし上と。

又た、天台円宗の意、三身並に常住無常の二義有ることを明す。且く『法華文句』第九に云く、

三身に並に非滅唱滅の義有り。『淨名』に云うが如く、「法は本と不生なり。今則ち滅無し」と。即ち是れ法身の非滅なり。又た云く、「是れ寂滅の義なり」と。即ち是れ唱滅なり。何となれば、若し己に了達すれば寂滅を唱えず、未了の者の為に滅を唱るのみ。若し照寂と言はば、即ち是れ滅と唱う。若し寂照と言はば、即ち是れ生を唱うるなり。夫れ法身とは、非生非滅なりと雖も、亦た生滅有り。若し迷心執著すれば、即ち煩惱生じて智慧滅す。若し解心、染無くれば即ち智慧生じて煩惱滅す。惑を滅して解を生ずるは、此れは是れ無常の滅なり。若し解生じて惑滅するは即ち是れ寂滅なり。此の

生滅は悉く法性に約して弁ず。若し迷解の二縁無くんば則ち此の生滅有りと唱えず。報身の非滅唱滅とは、誰が智慧有り、誰が煩惱有りて智慧能く破すと言うや。此れは即ち明闇相除かず、即ち報身不滅の義、衆生了らず。此れを聞きて便ち其れ即ち是れ仏なりと謂いて、憍恣を生じて復た修道せず、故に復た唱て道能く惑を滅すと言う。煩惱有る時は則ち智慧無し。智慧有る時は則ち煩惱無し。豈に智慧能く煩惱を滅するに非ずや。応身の非滅唱滅とは、応は是れ法報の用なり。体既に滅無し、用豈に窮り有らんや。即ち応身の不滅なり。但、衆生若し常に仏を見れば、則ち憍恣を生ずるが為の故に、我れ今夜に於て滅度を取るべしと唱う。又、法身は当体に不滅を明す。報身に不滅を説くは必ず法身に約す。理を以て論ずれば、智慧能く破すといわば、為に到るが故に破するや。到らざるが故に破するや。為に共なりや。為に独なりやと。此の如くを推すに理能破の功有ること無し、即ち智慧惑を滅せざる義なり。智慧有るときは則ち煩惱無きに就ては、即ち是れ慧能く惑を滅す。応身不滅を説く須く法報に約すべし。法報常然なれば応用絶えず、衆生尽きざれば即ち滅度せず。若し法身は当体に不生滅を論ず。報身は能く生滅無しと了達す。応身は相統して生滅せず<sup>上巳</sup>と。

又た、空宗三論、常無常の二義を存す。

且く『大乘玄論』に曰く、

若し常無常とは、別して言うことを為すは、法応二身を常と為す。化身は無常なり。通じて言うことを為すは、三身俱に常なり。俱に無常なり。化身は大悲を以て体と為すが故に是れ常なり。法身には隱顕有るが故に、義説すれば無常なり。化身は始起の義なれば是れ無常なり。『金光明經』に「応化の二身無常<sup>(81)</sup>」と云うは、迹を開して本に合するなり<sup>上巳</sup>と。

『寿量品の疏』に曰く、<sup>(82)</sup>

寿量に亦た三種有り、化仏の寿量は有始有終なり。故に二乗の人の為に八相成道して王宮に生を現す。双林に滅を示す。二に報仏の寿量は有始無終なり。故に下の文に曰く、我れ本と菩薩の道を行じて成ずる所の寿命、今猶お未盡なり。行因縁を以て初て仏果を証す。此の故に始め有り、一たび証して已後、湛然として滅せず、故に尽滅有ること無し。三に法身仏の寿量は本より有て不生不滅、無始無終なり<sup>上</sup>。

『法華玄論』第九に曰く、<sup>(83)</sup>

問う。余の二身は但だ是れ無常なり。亦た是れ常なることを得るや。

答う。義に通別有り。通じて論を為さば、三身皆な常なり。法身は始終無し。不生滅の故に常なり。法身有ることを以て常に菩薩を化して息む時無きが故に。応身も亦た常なり。二乗を化して亦た息む時無きが故に。化身亦た常なり。但だ此の縁息み、彼の縁息まざるに於てが故に。滅にして実には不滅と言うなり。『華嚴』に曰うが如し。譬えば、大火遍く諸の草を焼くに、此の処の草は尽きるが故に火滅すと言ひ、彼の処の草は尽きざるが故に滅せずと言うが如し<sup>上</sup>と。

或いは偏えに三身無常を説くの經有り。所謂る『大品涅槃』如化品の中に「是一切法畢竟性空乃至涅槃亦皆如化<sup>(84)</sup>」と説かるは、此れは法身無常の相貌を明かし、「色即是化受想行識即是化<sup>至乃</sup>一切種智即是化<sup>(85)</sup>」と宣べたるは、是れ報応無常の義相を顕わすなり。抑從上<sup>そしち</sup>の三義、散じて諸經に在り。高識博覽の人の能く知る所なり。已上、三身常無の三義を明かし竟んぬ。

問うて曰く、實に是れ此の三義、衆典に見たり。然るに今、宗師、三身無常の説を引きて如何が報身入滅の義を証するや。

答えて曰く、難家、『授記經』に依つて「報身常住永無生滅<sup>(86)</sup>」の責を致す。大師、之れを答えとして『大

品般若』に依つて之れを觀れば、果地の三身皆な同じく無常變滅の法なり。若し爾らば、『授記』の中に報身入滅の相を説くこと、何の相違か有らんや。然れば則ち、縦令い吾れ法身入滅の難を聞くと雖も、更に駭動すべからず。然る所以は、『大品』に「涅槃如化」の誠言有るが故なり。況んや報身轉變の旨に於ては全く疑恐すべからず云。

此の判釈、寔に以て高妙なり。尋常の諸師の上の一層級の詳勘なり。夫れ以れば、通論諸家の謬解を責めんが為に超えて世親論主を破し、報身入滅の一義を立てんが為に跳ねあがつて法身無常と存す。是れ即ち巧弁の高判なり。抑又た甚深の詳勘なり。孰れか之れを信遵せざらんや。

問うて曰く、胡んの道理有ればなり。牟尼至尊、一代五十年、三百六十余会の中に於て、常に従上の三義を説きたまうや。

答えて曰く、夫れ世俗建立門の日は且らく三身の名体有り。勝義皆空の時は永く六身の名体を亡けん。又た得証未廢の前には三身且らく歴史たり。廢証無得の後には四身永く絶絶たり。智人知んぬべし。

問うて曰く、此等の三義は是れ教門の施設とや為ん、是れ行者の感見とや為ん、如何。

答えて曰く、三義皆な行者の感見に有り。故に説教も亦た實に此の三説を存するのみ。

問うて曰く、此等の三義に於て、傍正の不同有りや。

答えて曰く、之れ無し。所以は何ん。三觀俱に息患の勝縁なるが故に。存没同じく解脱の良因なる故なり。

夫れ今、小師広く經論の明文を勘え、深く高祖の密意を得て、従上の一義を建立す。先代にも未だ此の判断を聞かず。将来にも亦た此の料簡有らず。若し後生有りて此の義を存立せば、正しく是れ小愚の徒弟なるべし。抑上来の所立、甚深にして亦た奥妙なり。若し此の義を看取して善く滋味を解すこと有らば、此れは是れ直也の人には匪ず。若し此の旨に致迷して反つて誹訕を生ずること有らば、斯れは是れ庸愚の

輩なるべし。来者、指を於是に染めよ。来者、指を於是に染めよ。古に曰く、

同じく有りて必ず異なることは、昔自り然る攸なり。楽しみ尽きて、哀れみ生ずるが古の常の事なり。以みるに連續勝が斧は十二由旬の鉄城を切り、総油縛が剣は一刀に千人の首を落とす。

尊号の利劍、其れ然らざらんや。南無阿弥陀仏。

凡愚住報勝 第十五

夫れ善趣前後の索多は応身如来の化益を蒙り、登地・登任の居士は報身覺王の開道に預かる。然るに今、西方の行人は一分の伏智をも生ぜず、毫釐の惑障をも断ぜずと雖も、唯だ散心稱揚の功力に依りて実報高妙の報土に詣ず。此れ即ち弥陀の弘願、難思の靈徳なり。諸仏如来、絶離の強縁なり。

玄文に云く、

弘願と言うは、『大経』に説くが如し。一切善悪の凡夫、生ずることを得る者は皆な阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為さずといふこと莫し<sup>上</sup>。

又た上に引く所の「由託仏願以作強縁」の高判、及び「依託如来本願勝力」の解釈、之れと合して料簡せよ。以れば頓説の梵席に凡夫大根性の者有りと雖も、只だ是れ暫らく影現の報土に居るのみにして、未だ豎次の実報に入らず。吾が宗の所談は然らず。夫れ具縛の痴薩埵等、忝けなくも如来撰凡の悲願に乗じて、一たび無漏実報の淨刹に詣ずれば、永く退転せずして終に覺位に至る。焉んぞ思議すべけん。於彼の秦皇、兕虎の猛威を振るいしや。蓬萊の島を求めて人に欺むかられん。漢武の大賢の佳名を播きしや。神仙の薬を温ねて世に軽んぜらる。勇士をも簡ばざるは是れ無常の殺鬼、豪賢をも論ぜざるは乃ち奪精の猛神なり。『宝積経』に曰く、「南無仏と称念する者は語業空しからず、是の如き語業をば執火炬と名づく。

能く煩惱を焼く」と。南無阿弥陀仏。

不求世樂勝 第十六

夫れ十二願王に奉仕するの彙いは現在に五種の勝益を求め、千手大士に帰依するの輩は此れ当に五八の悉地を望む。然るに今、安養の行者は所修の行を廻して、報刹の処に向かい、能求の心を励まして、界外の国を欣えり。若し此の義篇を約して之れを論ぜば、西方の行人を以て専ら大度測量勇健勇銳の上機と称し、正しく上根上智好人志幹の大士と名づけん。

夫れ如来は「若念仏者当知此人是人中分陀利華<sup>90</sup>」と歎じ、大師は「人中上上人、人中希有人、人中最勝人<sup>91</sup>」と褒したまうは、是れ此の謂いか。凡そ現世の求願は如来の意を痛しめ、当來の得脱は慈父の懷を叶える者なり。抑<sup>そも</sup>設<sup>せむ</sup>い求男求女、念に応じて来たり。増福増壽、縁に随つて感ずとも是れ全く冥旅の貯えに非ず。又た九山を海と成し、八海を山と成し、水を燃くこと油の如くにし、樹を咒<sup>た</sup>むること水の如くにも、更に黄壤の資にあらず。道人思察せよ。

請い問う曰く、他仏に帰仰する行人の中に菩提を求むるの輩無きに非ず。然りと雖も細人、麤人、二俱犯過の道理有り。学者商量せよ。

請い問う曰く、現生護念増上縁有ること、只だ是れ如来地瑟佉曩の力にして、全く行者素望の現益に非ず。所難の趣、今と不類なり。思<sup>あ</sup>いを知んぬべし。於<sup>あ</sup>戲、一毫の惑障を伏断せざる凡夫等、一向に菩提を求めて、更に現益を望まざることは、聖道の学者の絶離する所なり。余教の行人の及ばざる所なり。童子少なしと雖も、雨を興すの徳を具す。松柏<sup>しょうはく</sup>細なりと雖も、雲を陵ぐの氣有りとは、是れ称名行者の謂いなり。夫の余教の行人、兼て現利を求むるは、毒藥俱に服するが如く、西方の修者の偏えに当益を欣うは天

の甘露を餌するに似たり。二人の損益、学者自ら知れ。夫れ王夫人、甘泉を去りしかば、漢皇、別離の哀戚に沈み、楊玉妃、蓬洞に帰りしかば、唐帝、違約の愁涙を落す。有為の暴風、花の体をも惜しまず。遷変の嚴霜は玉顔をも侵損す。

夫れ称名の音は毒鼓の如し。一たび之れを聞けば無明の敵を殺す。尊号の徳は葉樹に同じ。僅かに之れを持つれば輪廻の瘵を治す。南無阿弥陀仏。

『浄土十勝箋節論』卷上 坤上終

【注】

- (1) 『念仏三昧詩集序』の一節で、道宣『弘明集』(正蔵五二・三五一中)に引用文あり。
- (2) 宗暁『楽邦文類』(『正蔵』四七・一九二中)。
- (3) 宗暁『楽邦文類』(『正蔵』四七・一八八上)に引用文あり。
- (4) 宗暁『楽邦文類』(『正蔵』四七・一七四下)に引用文あり。
- (5) 宗暁『楽邦文類』(『正蔵』四七・一七九上)に引用文あり。
- (6) 異本に「量」の後に「寿」の字あり。
- (7) 宗暁『楽邦文類』(『正蔵』四七・一八七上)に引用文あり。
- (8) 異本には「之」の字なし。
- (9) 異本の訓点に従った。
- (10) 異本には「弥陀」とある。
- (11) 異本には「神」とある。
- (12) 『夢中松風論』(『続浄』九・一八〇上)に智門が同文を引用している。
- (13) 慧皎『高僧伝』(『正蔵』五〇・三五九中)。
- (14) ルビは異本に従った。
- (15) 基『西方要決』(『浄全』六六・〇五下)。
- (16) 迦才『浄土論』(『浄全』六六・四三上)。
- (17) 迦才『浄土論』(『浄全』六六・三七上・下)。
- (18) 迦才『浄土論』(『浄全』六六・二七上)。
- (19) 善導『観経疏』(『浄全』二・二七上)。
- (20) 善導『観経疏』(『浄全』二・二三下)。
- (21) 法照『五会法事讚』(『浄全』六六・八二下)。
- (22) 大覚『四分律行事鈔批』(『卍統』四)全体の取意か。
- (23) 實叉難陀訳『華嚴経』(『正蔵』一〇・二五六中)。
- (24) 出典未詳、宗暁『楽邦文類』(『浄全』六九・五八上)に同文有り。
- (25) 湛然『止観輔行伝弘決』(『正蔵』四六・一八二下)。
- (26) 智顛『観経疏』(『正蔵』三七・一九三下)。
- (27) 慧遠『観経義疏』(『正蔵』三七・一八四下)。
- (28) 出典不明。
- (29) 善導『観経疏』(『浄全』二・二上)。
- (30) 善導『観経疏』(『浄全』二・五八下)。
- (31) 善導『観経疏』(『浄全』二・六八上)。
- (32) 法然『選択集』(『昭法全』三四九)。
- (33) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(『浄全』一八・一〇六下)にも引用されている。
- (34) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(『浄全』一八・一〇七上)にも引用されている。
- (35) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(『浄全』一八・一〇七上)にも引用されている。
- (36) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(『浄全』一八・一〇七上)にも引用されている。
- (37) 出典未詳。後に珂然『義山和尚行業記並要解』(『浄全』一八・一〇七上)にも引用されている。
- (38) 『莊子』雜篇 列御寇。
- (39) 『莊子注』、出典未詳。
- (40) 『莊子』外篇 秋水。
- (41) 『莊子注』、出典未詳。
- (42) 玄英『莊子疏』、出典未詳。
- (43) 法然『選択集』(『昭法全』三四八〜三四九)。

- (44) 『荀子』勸學。
- (45) 智顛『摩訶止観』（『正蔵』四六・一上）。
- (46) 志磐『仏祖統紀』（『正蔵』四九・一八六上）中。
- (47) 智顛『摩訶止観』（『正蔵』四六・一中）下。
- (48) 湛然『止観輔行弘決』（『正蔵』四六・一四二中）。
- (49) 志磐『仏祖統紀』（『正蔵』四九・一八一中）。
- (50) 戒珠『浄土往生伝』（『正蔵』五一・一九上）。
- (51) 道宣『統高僧伝』（『正蔵』五〇・六八四上）。
- (52) 玄奘訳『大般若波羅蜜多經』（『正蔵』六・八七〇上）中。
- (53) 出典未詳。
- (54) 仏陀跋駄羅訳『華嚴經』（『正蔵』一〇・八三上）。
- (55) 出典未詳。
- (56) 少康『瑞応伝』（『正蔵』五一・一〇五下）。
- (57) 『後漢書』三八、「張宗伝」。
- (58) 伝龍樹『菩提心論』（『正蔵』三三・五三七下）。
- (59) 曇鸞『往生論註』（『浄全』一・二四上）。
- (60) 善導『般舟讚』（『浄全』四・五三〇上）。
- (61) 法然『無量寿経釈』（『昭法全』六八）。
- (62) 善導『般舟讚』（『浄全』四・五三〇上）下。
- (63) 『莊子』雑篇。
- (64) 伝羅什訳『仁王般若波羅蜜経』（『正蔵』八・八三〇上）。
- (65) 善導『観経疏』（『浄全』二・二二上）。
- (66) 懷感『釈浄土群疑論』（『浄全』六・六下）。
- (67) 有範『大日経疏妙印鈔』（『正蔵』五八・四四中）に同文あり。
- (68) 澄観『大方広仏華嚴経随疏演義鈔』（『正蔵』三六・三四六上）に同文あり。
- (69) 龍樹造『大智度論』（『正蔵』二五・三八二上）。
- (70) 護法造『成唯識論』（『正蔵』三一・五七下）。
- (71) 出典未詳。
- (72) 澄観『大方広仏華嚴経随疏演義鈔』（『正蔵』三六・六一八下）。
- (73) 智顛『法華経玄義』（『正蔵』三三・八〇二下）。
- (74) 曇無讖『大方等大集経』（『正蔵』一三・一五下）。
- (75) 湛然『止観輔行弘決』（『正蔵』四六・一五二上）。
- (76) 智顛『維摩経略疏』（『正蔵』三八・六三六中）。
- (77) 出典未詳。
- (78) 最澄『守護国界章』（『正蔵』七四・二二三下）。
- (79) 空海『真言雜問答』（『弘法大師全集』一・一八六）一八八）。
- (80) 智顛『法華文句』（『正蔵』三四・一三三中）。
- (81) 慧沼『金光明最勝王経疏』（『正蔵』三九・三三〇下）。
- (82) 吉藏『法華義疏』（『正蔵』三四・六〇三上）。
- (83) 吉藏『法華玄論』（『正蔵』三四・四三九上）。
- (84) 出典未詳。鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（『正蔵』八・四一六上）に同文あり。
- (85) 出典未詳。鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』（『正蔵』八・四一五下）に同文あり。
- (86) 出典未詳。善導『観経疏』（『浄全』二・二一上）に同文あり。
- (87) 出典未詳。
- (88) 善導『観経疏』（『浄全』二・二一上）。
- (89) 菩提流支訳『大宝積経』（『正蔵』一一・二六中）。
- (90) 冨良耶舎訳『観無量寿経』（『浄全』一・一五）。
- (91) 善導『観経疏』（『浄全』二・二一上）。